

教授はしかめていた顔をたちまち明るくして、「デニス副学園長」と両手を開いた。

「久しいですね教授。分館ができる前の発表会で会って以来かな？」

「ええ、もう七年も前のことですよ。それにしても立派になられて」

そうしてデニスと教授は、和やかに話をし始めた。

教授と旧知の仲だったのかとか、背がものすごく高いとか、なんて端正な顔立ちなのだろうとか、三十半ばにしては雰囲気は円熟し過ぎていたりとか、冷静に考えられる余裕はない。

ロインは心臓を掴まれたように、デニスを見つめた。

「それにしても、なんだかずいぶん白髪が増えたようだ」

デニスが意地悪に笑いながら言うと、教授は肩をすくめて、

「いやはや、手のかかる生徒が多くて、心労が絶えませんで」

「貴方が教鞭を取るのなら、いるのは優等生ばかりだろう」

「いやいや、そんなことは。現に今も生徒と揉めておりましたな」

教授は横目でロインを見た。

「理知的な学生じゃないか」

教授の視線を追い、デニスはロインに向いて、

「君、名前は？」

「ロ、ロインです」

名乗りながら、ロインはにわかに興奮する。

デニスが、話しかけてきてくれた。

このチャンスは逃せなかった。

ロインは背を伸ばして、

「デニス副学園長。貴方の論文は全て拝読させて頂きました」

「ほう、全部？」

デニスは目を細めて、

「私の論文は、十や二十では利かないはずだが……それを、全部かね？」

「全部です！」

デニスと会話をしている事実、ロインはだんだんと勢いづいて、

『漂着物分類・ネイクス大陸』も、『魔法構造解析』も、『血塗られし戦争におけるネイクスの民衆意識の変遷』も、『血種別魔法エネルギー能力比較』も——鋭い着眼点と型に捉われない発想、そして何より説得力を持たせる軽妙な語り口で、どれも夢中になって読みました！

貴方はあらゆる角度から平和の維持や文明発展、社会貢献に寄与している素晴らしい人です。私は貴方に憧れて研究者を志したんです！」

ロインは、デニスと話ができて、

想いを伝えられていることへの幸福感をひしひしと感じていた。

デニスは興味深げにロインを見つめ、

「私の全ての論文を読んだというのなら、ひとつ。君は私が一昨年前に発表した『シェンティア都市の防衛機能の脆弱性と対策』について、どう思う？」

「はいっ」

予想外の質問に、ロインはまた嬉しくなって、

「血塗られし戦争時代の都市対策は、論文の通り、やはり危ういものがあると考えます。

街そのものの構造や法の整備などが今後の対策として問題提起されていましたが、私はそれらを遂行するにしても、現状の態勢だけでは限界があると認識しています。

だからこそ、代替可能なエネルギーの活用と応用こそが有効であると考えています」

ロインの答えを聞いたデニスは、小さく笑った。

そして、

「ロイン君。今はどんな研究を？」

「海流と漂着物が主です」

「——君はこれから、どんな研究をしたいと思っているんだい？」

その質問に、ロインは緊張した。

試されている——。

この質問に対する答えこそ、デニスと自分との間に「縁」が通うかどうかを左右するのだと、ロインは瞬間的に、漠然と感じた。

「わ、私は……」

繋がりをもちたいからといって、

相手が望んでいそうな答えを返すという下卑た策は弄さない。憧れの人にそれをするというのは、研究者を極めたいという自分の夢に嘘を吐くことになるからだ。

だからロインは正直に、

「私は、魔法の原理と、応用魔法についても研究を進めたいんです」

「魔法の原理と応用」

「はい。シェンティア設立により少しずつ解明は進んでいるものの、まだまだ未知の部分があると考えています。魔法エネルギーというのは、人々の役に立つ——戦闘や日常生活だけでなく、もっと大規模な、生活基盤そのものを支え得るような、大いなる力に変換できる。そんな可能性を秘めた原石だと考えているんです。むろん、デニス副学園長が仰っていた、邪獣の猛威への対抗策にも」

「よろしい」

デニスは満足したように頷き、

一層に笑みを濃くして、

「ロイン君。君はこれから本館で学びたまえ」

「え？」「は？」

まったく予想していなかった返答に、ロインと教授の声が重なった。